

『見えるようになるために』（ヨハネの福音書 9:1～7・39）

【開会聖句】

9:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えな
い者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

<序論>

・福音書にはイエス様がなされた多くの奇跡が記されています。ただ、生まれたときから
病気（障害）のある人が癒されるという奇跡はこの箇所だけです。弟子たちはイエス様が
通りすがりに盲目の人をご覧になっているのを見て、尋ねます。

「先生、この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。
両親ですか」（ヨハネ 9:2b）。

弟子たちの関心事は、彼が生まれたときから盲目であった原因はどこにあったかという
ことでしたが、それは、彼への同情心とか誠実な関心によるものではなく、単に興味本位
と言うか、自らの好奇心を満たすためであったと思います。

<本論>

1、この人に神のわざが現れるため

この人は、8節を見ると、物乞いをしていたと記されています。本当に貧しい暮らし
ぶりだったでしょう。当時のユダヤでは、そのような不幸は、彼自身、或は、両親が
犯した罪が原因だと考えられていました。今の日本にもそのような考え方があります。

「因果応報＝前世における行為の結果として現世における幸不幸があり、現世におけ
る行為の結果として来世における幸不幸が生じる（大辞林第三版）」。イエス様の時代
のユダヤにも、ギリシア哲学から影響を受けたと思われる奇妙な説と言うか、おかし
な考え方があったようです。それは、例えば、すべての人間の魂は、この世界が創造
される以前から、既に「エデンの園」に存在しており、それぞれが肉体に入るのを待
っていたのだけれども、その魂には善いものと悪いものがあつた、という説です。
そんなこと、旧約聖書には一切書かれていないのですが……。ですから、弟子たち
は、彼が、生まれたときから目の見えない人であつたにも拘らず、この人自身が罪を
犯したからですかというような、おかしな質問したんですね。

また、「両親ですか」という質問の背景には、旧約聖書の有名なことばがあつたと思
われます。それは「出エジプト記」20章の「モーセの十戒」の一節です。

『あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神。わたしを憎む者には父の咎を子に
報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを

千代にまで施すからである』(出エジプト 20:5b~6)。

けれども、イエス様は弟子たちからの質問に対して次のように答えられました。

「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです』(ヨハネ 9:3b)。

イエス様は、この人が盲目に生まれついた原因は罪にあるのではない、とはっきりと否定されたのです。それは言い換えれば、わたしは、お前たちが興味本位で知りたがっているような旧約律法の解釈や一般原則みたいなことを語るつもりはない。そんなことではなく、わたしは、この人自身のこと、この人のこれからのこと、未来について語るのだ、ということではないでしょうか。

今朝の箇所少し前、8章の冒頭に、姦淫の現場で捕えられた女性の話が記されています。律法学者とパリサイ人は、その女性をイエス様の前に連れて来て、

「先生、この女は姦淫の現場で捕えられました。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするよう私たちに命じています。あなたは何と言われますか」(同 8:4b~5)と尋ねます。彼らはイエス様を罾にかけようとしたのです。ところが、そんな彼らに向かってイエス様は、

「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい」(同 8:7b)

と答えられました。すると、年長者たちから始めて皆が去っていき、誰もいなくなりました。そして、その女性と二人きりになった時、イエス様は彼女に言われたんです。

「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません」(同 8:11b)。

モーセの律法の通りに、つまり正論に従うならば、このような女は石打ちにするのが当然なのです。しかし、イエス様は「わたしもあなたにさばきを下さない」と宣言し、これからのあなたの人生を大切に生きなさい、と彼女を送り出されたのです。

藤木正三師の本に次のような一文がありました。それは「正論と愛」と題された断想です。

「わかっているで止められないのです。浅ましいと思いながら執着するのです。どうでもよいことに意地をはるのです。この人間の愚かさ、弱さ。それに甘えてはなりません。しかし、道理の通った正論でこの弱さをさばかれてはたまらないのも事実です。正論とは、道理は通っているが人間に届いていないせつかさです。道理は通っていないが人間に届いているゆるやかさ、それを愛と言います。道理が通っていないという理由でこれを斥けてはなりません。人間の弱さに対する洞察において、正論は遠く愛に及ばないのです」。ⁱ

この世は正論を戦わせる世界です。しかし、イエス様のさばきは、いつも正論ではなく、愛(アガペー)に基づくものでした。

2、信じることと行うこと

さて、今朝の話に戻りますが、イエス様は地面に唾をして泥を作り、その泥を目の

見えない人の目に塗って言われました。「行って、シロアムの池で洗いなさい」。エルサレムという町は高地にありますので、飲み水を確保するための貯水池がいくつかあり、この「シロアムの池」もそのうちの一つでした。

『そこで、彼は行って洗った。すると、見えるようになり、帰って行った』(ヨハネ 9:7b)。

ヨハネの説明は実に簡潔です。しかし、この目に見えない人にとって、イエス様が言われたことは決して容易いことではなかったでしょう。何しろ今から 2000 年前の話ですから、バリアフリーも何もあったもんじゃありません。彼のような目が見えない人にとって、それは本当に大変なことだったと思います。けれども、彼はイエス様のことばを聞き、すぐにそれを行ったのです。

ここにも大切なことが示されています。私たちが救われたのは、もちろん神からの一方的な恵みによるものです。「エペソ人への手紙」に『この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です』(エペソ 2:8) とある通りです。ただ、イエス様はあの「山上の垂訓」の最後で言われました。「ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます」(マタイ 7:24)。先程の「エペソ人への手紙」の続きにも次のように書かれています。

『実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました』(エペソ 2:10)。

「信じる」と「行う」ことは、決して相反することではありませんし、対立することでもありません。そこに順番はありますが、一体のものなのです。

<結論>

さて、今朝の奇跡の後、目が見えるようになった人はパリサイ人から厳しい質問攻めに遭います。パリサイ人たちは、ああでもない、こうでもない、どうしても自分たちの正しさを示したかったみたいですね。そんな彼らに対して、この人の答えは実にシンプルです。彼は自分が体験したことだけを証言しています。

『彼は答えた。「あの方が罪人かどうか私は知りませんが、一つのことは知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。』(ヨハネ 9:25)。

パリサイ人たちは聖書を隅から隅まで調べ上げ、よく知っていました。しかし、彼らは、最も大切で肝心な一つのことを知らなかったのです。否、知らなかったと言うより、体験していなかったと言った方がよいでしょう。彼らが体験していなかった一つのこととは、真の救い主であるイエス様と出会い、新しく生まれるということです。彼らの肉体の目は開いていましたが、心の目、霊的な目は閉ざされたままだったのです。

このやり取りの後、目が見えるようになった人は外に追い出された、とヨハネは記して

います。つまり、彼はユダヤ人のコミュニティから追放されてしまったのです。しかし、イエス様はそんな彼をお見捨てにはなりませんでした。

『イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」』(同 9:35)。

ご自分のことばに従ったがゆえに、この世から追い出されてしまった者を、イエス様は必ず見つけ出し、そして言われるのです。「あなたは人の子を信じますか」と。

最後に今朝の開会聖句です。

『そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」』(同 9:39)。

生まれたときから目の見えない人が見えるようになるというのは、どれほどの喜び、感動でしょうか。私たちには想像もつかないことですが、イエス様が来てくださったのは、そのような、ものすごい、想像もつかないような喜び、感動、盲目であった者の目が見えるようになるためでした。その驚くべき恵みを覚えつつ、今週も歩みましょう。

i 「福音はとどいていますか」 藤木正三、工藤信夫著 ヨルダン社 P262~263